

武蔵野日曜集会

大祭司の祈り

――ヨハネ伝第17章――

1968年6月16日

小池辰雄

別れを告げる最後の祈り 預言者と祭司 使徒 永遠の祭司 永遠の贖罪 真の幕屋 時来れり イエス・キリストを知るにあり 神の栄光の顕れ 大祭司の執成し 遣わされた者 一つとならんため キリストの本願

【ヨハネ17】

「イエスこれらの事を語りて、目を挙げ天を仰ぎて言い給う『父よ、時来れり、子が汝の栄光を顕さんために、汝の子の栄光を顕したまえ。』² 汝より賜わりし凡ての者に、永遠の生命を与えしめんとて、万民を治むる権威を子に賜いたればなり。³ 永遠の生命は、唯一の真の神に在す汝と汝の遣し給いしイエス・キリストとを知るにあり。⁴ 我に成さしめんとて汝の賜いし業を成し遂げて、我は地上に汝の栄光をあらわせり。⁵ 父よ、まだ世のあらぬ前に汝と偕にもちたりし栄光をもて、今御前にて我に栄光あらしめ給え。⁶ 世の中より我に賜いし人々に我、御名をあらわせり。彼らは汝の有なるを我に賜えり、而して彼らは汝の言を守りたり。⁷ 今かれらは、凡て我に賜いしものの汝より出づるを知る。⁸ 我は我に賜いし言を彼らに与え、彼らは之を受け、わが汝より出でたるを真に知り、なんじの我を遣し給いしことを信じたるなり。⁹ 我かれらの為に願う、わが願うは世のためにあらず、汝の我に賜いたる者のためなり、彼らは即ち汝のものなり。¹⁰ 我がものは皆なんじの有、なんじの有は我がものなり。我かれらより栄光を受けたり。¹¹ 今より我は世に居らず、彼らは世に居り、我は汝にゆく。聖なる父よ、我に賜いたる汝の御名の中に彼らを守りたまえ。これ我等のごとく、彼らの一つとならん為なり。¹² 我かれらと偕におる間、われに賜いたる汝の御名の中に彼らを守り、かつ保護したり。そのうち一人だに亡びず、ただ亡びの子のみ亡びたり、聖書の成就せん為なり。¹³ 今は我なんじに往く、而して此等のことを世に在りて語るは、我が喜びを彼らに全からしめん為なり。¹⁴ 我は御言を彼らに与えたり、而して世は彼らを憎めり、我の世のものならぬごとく、彼らも世のものならぬに因りてなり。¹⁵ わが願うは、彼らを世より取り給わんことならず、惡より免らせ給わんこ



となり。¹⁶ 我の世のものならぬ如く、彼らも世のものならず。¹⁷ 真理にて彼らを潔め別ち給え、汝の御言は真理なり。¹⁸ 汝われを世に遣し給いし如く、我も彼らも世に遣せり。¹⁹ また彼等のために我は己を潔めわかつ、これ真理にて彼らも潔め別たれん為なり。²⁰ 我かれらの為のみならず、その言によりて我を信ずる者のためにも願う。²¹ これ皆一つとならん為なり。父よ、なんじ我に在し、我なんじに居るごとく、彼らも我らに居らん為なり、是なんじの我を遣し給いしことを世の信ぜん為なり。²² 我は汝の我に賜いし栄光を彼らに与えたり、是われらの一つなる如く、彼らも一つとならん為なり。²³ 即ち我かれらに居り、汝われに在し、彼ら一つとなりて全くせられん為なり、是なんじの我を遣し給いしことと、我を愛し給うごとく彼等をも愛し給うこととを、世の知らん為なり。²⁴ 父よ、望むらくは、我に賜いたる人々の我が居るところに我と偕におり、世の創の前より我を愛し給いしによりて、汝の我に賜いたる我が栄光を見んことを。²⁵ 正しき父よ、げに世は汝を知らず、然れど我は汝を知り、この者どもも汝の我を遣し給いしことを知れり。²⁶ われ御名を彼らに知らしめたり、復これを知らしめん。これ我を愛し給いたる愛の、彼らに在りて、我も彼らに居らん為なり』

●別れを告げる最後の祈り

イエスのこの世に対する別れの言葉が14章から始まっているわけですが、今日のところがその最後のところです。ヨハネ17章というのは大変なところであります、私が解説なんのできる場所ではない。ベンゲル（ヨハン・アルブレヒト・ベンゲル 1687～1752）というピエテステンの方の有名な註解者――ベンゲルの註解というのは永遠的な価値があると思っておりますが、非常に簡単な註なんですけれども、なかなかうがつている――その一番先に、「極めて簡単な言葉で、しかも全聖書のうちで最も深いことがここで語られている。これはイエスの祈りであつて、もはやただ私たちに対する言葉ではない。」と、彼は言っております。それでこれを「大祭司の祈り」という題で言われております。今日も、私はそう書いたんですが、このことはまた主の祈りであるわけです。

「天にまします我らの父よ……」

という、あれも主の祈りですけれども、あれは主が

「このように祈ったらよろう」

と、ひとつのサンプルを与えられたわけですが。ここでは、そういうサンプルとかいうのではなくて、イエスがいよいよこの地上に対して別れを告げる最後の祈り。もちろん、このあとにゲッセマネの祈りというのがありますけれども、こういう祈りが全章を、17章全部が祈りですから、珍しいところです。



●預言者と祭司

ところで、「祭司」という。簡単な言葉でいうと、坊さんですね。聖書には、預言者と祭司がいるわけです。これが旧約聖書において大きな役割を果している。預言者というのは、自分で決心でもって、

「ひとつ預言者になりましょう」

なんていって、預言者になれるものではない。信者でもそうですよ。よく、お話しをして、

「さあ、決心が付きましたか」

といって、「決心カード」なんかを出すよ。よくそういうのがありますよね。決心という。しかし、人間の決心なんてものは当てにならない。なるほど、人間というものは、ある時は決心という現象もあるでしょう。けれども、信仰の世界は決心でどうかなる世界ではない。

それは本当に聖書の言葉、霊言にとらえられ、ある時にある話を聴きながら、それでどうにもならなくて打たれたと。捕まえられる、呼び出されるということ。大体、「エクレシア」「教会」という字がそういう字ですからね。

「呼び出^{いだ}されたる者たちの群れ」

というのが「エクレシア」という。「エク カレオー」といって、呼ばれてそこから出された、この世から呼び出された者、召し出された者。もともと「教会」という名前は本当はそういう根源の意味を持っていたということを教会の方がうつかり忘れて、「決心した者の群れ」なんて思ったら、とんでもない間違いです。神さまに呼ばれた者です。神さまの方から呼んでいるので、愛惜してやまない。今の讃美歌にもあつたとおり、

「主は手を広げて待ちたもう」

という。「さ迷う者帰りきたれ」と。そういうわけです。

とにかく、神さまに、ある時に呼ばれる。「ベルーフ」「天職」というのがそうなんだから。我らの天職というのは、

「お前はこういうことをしろ」

といって、神さまに呼び出された仕事、それが天職、「コーリング」「ベルーフ」という。これは神さまの声なんだから。人間の叫びではない。本来みんな上からきている。アブラハムは神さまに呼ばれて、ウルを立ち出て、

「己の親族から出て、汝はわが示さんとする地へ行け」

と。創世記12章。アブラハムが即ち預言者の最初の人です。「モーセは最大の預言者」なんて書いてあるところがあるけれども、とにかく、最初の預言者はアブラハムです。アブラハムよりか前にもまだそういうのがあるですよ。エノクなんていうのは神さまに呼ばれた。

それが呼ばれて、呼び出されて、そして、

「さあ、その言葉を伝えなさい。民に神の言葉を伝えよ」

と。それが預言者です。だから、言葉を神さまから預かって語る者が預言者である。なに



か占いするようなあの予言とはちがう。ギリシア語の「プロフェトス」という字はいわゆる予言的な意味も持っているような字だけれども、ヘブライ語の「ナビー」という字はむしろ、

「神によつて霊を受けた者、それによつて泡立つごとく語る者」というわけです。それが預言者。

もうひとつは「祭司」。祭司は、執り成す人です。上からの神さま声を執り成す、伝えるのが預言者である。祭司は本来、人の声を、人の叫びを、人の嘆きを、人の悲しみを、人の願いを執り成して、そして、神さまに伝える。だから、預言者の方がもともとグルント（根底、土台）です。まず先に預言者。それから祭司。歴史的にいつてもそうですね。預言者が本当に預言者ならば必ずまた祭司的な面を持つはずです。だから、預言者とか祭司とかいいますが――また、祭司も本当の祭司であるためにはやはりそのグルントに預言者のな面を持たなくては本当の祭司になれない。いわゆる職業的な祭司、職業的な預言者というものもあるですよ。それは本当の預言者でも祭司でもない。エレミヤというのは祭司の族、祭司の子なんです。けれども、彼は祭司の子だから祭司になったのでもない。本当にエレミヤは呼び出されて預言者となった。エレミヤ記1章をみると、そのことがはつきり出ている。まだ若いときに、

「お前は民に語れ。お前を万国の預言者とする」

「いえ、私はまだ若くてとてもダメです」

と言ったら、

「そんなことを言うな。私がお前を立てたんだ」

とはつきり、エレミヤ記1章に書いてあるとおりです。そのエレミヤが民のために執り成して、「涙の預言者」といわれる。心の預言者といってもいい。非常に心情の深い人です。これが即ち、本当のまた祭司でもあった。だから、預言者と祭司は両方は離すことができない。大体、本当の実存というものは、本当の実質のある真理というものは、必ず両面を持つている。ただ一つというのはどこか欠けてしまう。義といえば愛。愛といえば義。その両面がなければダメです。線が太い、また線の細いものもなくてはいかん。ベートーベンの音楽でも、ゲーテの詩でも、非常に力強いものと共に非常に繊細なものがある。みんなそうなんです。「ガンツハイト」という全体、あるひとつの「オルガーニッシュ」な、有機体的な全体というものは、みなそういう面を持つている。

●使徒

キリストは預言者中の預言者、祭司中の祭司。彼は両方持っている。大預言者にして大祭司である。ここでは即ち「大祭司の祈り」という。イエスは預言者の極まったものであり、祭司の極まったものである。



それでは、キリストを信ずる私たちは何か。キリストのあとから今度は別な言葉が出てきた。「使徒」「アポステル」というのが。

「使わされたる者」

という。今の普通の国の間でも、国を代表して別な国に遣わされた者は、大使とか公使だとかいうね。使者、国の使い人。ロンドンにいる日本大使とか。ところが、キリストのあとからは、預言者でもなかった、祭司でもなかった。これは使徒という。使徒はもちろんその中味に、預言者的なものと祭司的なものを持つているわけです。キリストの直接の使徒たちはそうだったが、では、我々は、そのあとの平信徒はどうだと。

ところが今度はまた、キリスト教界でも「ローマ法王」なんていうね。これは大祭司だから。大祭司の新しい制度ができてしまつて、それは「ローマ教皇」という。これはカトリックの伝統ですよ。大祭司の親玉は使徒ペテロである。だから、祭司とか司教とか、ローマンカトリックの方にはいろいろ坊さんの階級があるでしょ。あれは祭司的な宗教です。

大体、大祭司というような気持で実際に出てきたのは、バビロニア捕囚のあとです。ペルシャ王クロスが捕囚の民を帰したでしょ。エルサレムを中心にしたイスラエルに帰ってきた。そこで神殿が建つた。紀元前515年に第二神殿が建つて、それからあとの宗教をユダヤ教という。そのユダヤ教の一番親玉がこの大祭司なんです。それからいろんな祭司がいる。教法師とか。モーセの十誡の律法の先生やなんかが。

だから、その後の宗教は大祭司中心の神殿宗教、祭司宗教なんだ。そして、イスラエルの民はそういった宗教的団体の民であつて、もはや政治的国家を形成している民ではなくなつたので、完全に宗教的な祭司宗教の民族形態になつたわけです。そこで、年に一回、大祭司が神殿の中に入つて、民の罪の執り成しをやつた。羔をほふつて年に一回だけです。レビ記16章にそういうことが書いてある。レビ記というのはもちろんずっとあとの内容がそこに折り込まれてある。アロンの二人の子が云々と、歴史的に書いてあつて、贖罪の儀式のことがずっと書いてある。このことは大祭司宗教の型がここに反映して書かれてある。レビ記23章もそうです。26節から32節あたりのところに。大祭司がどのようなことをするかということが書いてある。もちろん、贖罪、燔祭のことが書いてある。

キリストは、もうご承知のとおり、彼自身が即ち大祭司となつて、そして彼自身がまた、屠られたる羔こひつじとなつて、もう年に一回そんなことをする必要はない。彼自身が即ち、十字架にかかる。即ち、屠られた羔となつた。そして、我々の罪の贖いを、旧約聖書のそういった儀式的な象徴的なことが全部、実質をもつてそれが満たされたというのがこの新約における救いの事態ですからね。

●永遠の祭司

それでついでもう少し我々はどうしても見なければならぬところがある。ヘブル書



7章からです。ヘブル書はたまにじっくり読んでみてください。素晴らしいところです。

「此のメルキゼデクはサレムの王にて至高いとき神の祭司たりしが、

「メルキゼデク」という名は——「メレク」というのは「王」、「セデク」というのは「義」という字——「義の王」という意味です。「サレム」は「シャーローム」「平和」。

王たちを破りて還るアブラハムを迎えて祝福せり。

これは創世記14章に書いてあることです。

2 アブラハムは彼に凡ての物の十分の一を分け与えたり。その名を積けば第

一に義の王、次にサレムの王、すなわち平和の王なり。

「メデク・シャールーム」なんだな。

父なく、母なく、系図なく、^{よわい}齡の始なく、生命の終なく、

実に不思議なことが書いてある。

神の子の如くにして限りなく祭司たり。」（ヘブル 7:1-3）

「父なく、母なく、系図なく」という。父なく母なき人なんてありますかね。そういう実に不思議な人間がこのアブラハムの執り成しをして祝福をしたことがあった。祭司もまた預言者も、いろいろ質的な要素もあるでしょうけれども、本質的には天的な使命と存在をもつて、非連続の連続式な在り方をしていくところの者たちです。

親が預言者となつたつて、子どもが預言者になれない。そういう意味において、「父なく母なく」といつた氣持なんです。もちろん、人間としての父と母はいるでしょう。けれども、全く忽然として神に呼び出され、新しく生まれさせられ、そして神の使命を行ずる者、それが預言者でありまた祭司である。そういった氣持がこの三節の中に表れている。いうまでもなく、またこれはキリストを表しているといつてもいいようなわけです。キリストはヨセフという父があつたけれども、そういう父はもはや父ではない。イエスがヨハネ伝17章で「父よ」と言っているこの「父」はもちろん靈界の父、神です。

そして、メルキゼデクのことがずっと書いてありまして、22節に、

「²² イエスは斯くも優れたる契約の保證となり給えり。²³ かの人々は死によりて永くその職に留ることを得ざる故に、祭司となりし者の数多かりき。²⁴ されど彼は永遠に在せば易ることなき祭司の職を保ちたもう。

キリストという祭司は永遠の祭司である。

25 この故に彼は己に頼りて神にきたる者のために執成をなさんとて常に生く

れば、之を全く救うこと得給うなり。」（ヘブル 7・22〜25）

キリストはそうにして、永遠に生くところの祭司である。人を本当に救いあげるところの執り成しの人。だから、救うという角度からいいますと、祭司の務めの方が預言者よりも大事なんです。無教会では「預言者、預言者」と言つて、えらく預言者きどりをするようないことがあつたようですけれども、大体、預言者なんて言つたつて、御霊が来な



ければ、預言者なんて言ったら本当はおかしいんですよ。

●永遠の贖罪

イエスはそのような執り成しのひと。マルチン・ルターが万人祭司主義みたいなことを、「全ての信徒は祭司である」

と言った。そのとおりです。ルターはその点ではつきりとつかむものをつかんでいた。いわゆる専門の坊さんは要らんと。なるほど、プロテスタントには牧師さんはいるさ。いるけれども、しかし、本当の意味においては一人びとりが牧師です。一人びとりが祭司、一人びとりが預言者です。そんな預言者だとか祭司なんて言う必要がない。一人びとりは本当に使徒と、使徒的な者にならなくてはいいかん。使徒的信仰というものに本当に帰らなくてはいいかん。この「使徒」という言葉の中には両方がちゃんと入っている。

「²⁶斯くのごとき大祭司こそ我らに相応^{ふさわ}しき者なれ、即ち聖にして悪なく、^{けがれ}穢なく、罪人より遠^{つみびと}ざかり、諸般^{もろもろ}の天よりも高くせられ給えり。²⁷他の大祭司のごとく先ず己の罪のため、次に民の罪のために日々犠牲^{いけにえ}を献ぐるを要し給わず、

そんなような旧約的な祭司ではありませんよと言っている。

その一たび己を献^{けん}げて之を成し給いたればなり。」（ヘブル7・26〜27）
罪の贖いを成し遂げた。「一たび己を献^{けん}げて」というのはそのあとの方を読めばはつきり出ている。9章の12節、

「¹¹然れどキリストは来らんとする善き事の大祭司として来り、手にて造らぬ此の世に属せぬ更に大なる全き幕屋を経て、¹²山羊^{やぎ}と犢^{こうし}との血を用いず、己が血をもて只一たび至聖所に入りて、

十字架のことですよ。

永遠の贖罪を終えたまえり。」（ヘブル9・11〜12）

とあるでしょ。これが即ち、キリストが完全に贖罪を果してしまった。

「²⁸律法は弱みある人々を立てて大祭司とすれども、律法の後なる誓いの御言は、永遠に全うせられ給える御子を大祭司となせり。」（ヘブル7・28）

と。どうですか。ヘブル書というのは非常にそういうところははつきり、旧約の聖書はいかにここにアウフヘーベンされたか、棄^す揚^たされてしまったか。そして、満たされたかというところがもう実に明瞭に言われている。これはヘブル人に当てた手紙だから、ヘブル人はもう旧約にこだわっているから、そうじゃないんだと。こんなヘブル書なんて素晴らしいのがあるくせに、ユダヤ人はあいかわらずこれを受けとらないんだから、全くユダヤ人の頑固さは、うなじこわき加減は大したもんですよ。



●真の幕屋

「今いう所の要点は斯くのごとき大祭司の我らにある事なり。彼は天にては
みいつの御座みくらの右に坐し、²聖所

「聖所」というのは天なる聖所、

および真の幕屋まことに事つかえたもう。

ここに「幕屋」という言葉がある。なぜ、私たちが「幕屋」という言葉を使うかというと、幕屋というのは、モーセのイスラエルの民の出エジプトのときから、新約のヘブル書や、福音書の終わりにから黙示録までずっと一貫して貫いていて、その動的な在り方やその構造は素晴らしいものだからです。

この幕屋は人の設くるものにあらず、主の設けたもう所なり。³おおよそ大祭司の立てらるるは供物そなえものと犠牲いけにえとを献げん為なり、この故に彼もまた献ぐべき物あるべきなり。⁴然るに若し地もに在いまさば、既に律法おきてに循したがいて供物を献ぐる祭司等あるによりて祭司とはなり給わざるべし。⁵彼らの事つかうるは、天にある物の型と影となり。」（ヘブル8:1-5）

キリストのはそんな型や影ではないということが縷々ると書いてある。9章では、特に幕屋の中の構造が書いてあって、いかに執り成しをしたか。9章11節にあるように、

「然れどキリストは来きたらんとする善き事の大祭司として来り、手にて造らぬ此の世に属せぬ更に大なる全き幕屋を経て、……¹⁴まして永遠の御霊により瑕きずなくして己を神に献つかげ給いしキリストの血は、我らの良心を死にたる行為より潔めて活ける神に事つかえしめざらんや。」（ヘブル11:11-14）

と言って、本当の中保なかだちとなつた。10章19節、

「然れば兄弟よ、我らはイエスの血より、²⁰その肉体たる幕を経て我らに開き給える新しき活ける路より憚はばらずして至聖所に入ることを得、

このキリストの死によって贖われたから、もはや、あるがまま、はばかりずして入ることができる。既に贖われたる我であるからと。こういうことです。そして29節、

²⁹まして、神の子を踏みつけ、己が潔められし契約の血を潔からずとなし、
恩恵めぐみの御霊あなごを侮る者の受くべき罰の重きこと如何許いかばかりとおもうか。」

と。どうですか。この恩恵の聖霊をあなどるところの事態は、その受くべき罰はいかばかりぞやという。

「聖霊のことをなみして、ただ十字架、十字架なんて言つてたつてダメだぞ」とはつきり言っているんですね。

お家へお帰りになったら、今日はヘブル書の7章から10章までをじっくり読んでいただきというわけです。



●時来れり

今度は、ヨハネ伝17章にもどります。

「イエスこれらの事を語りはて、目を挙げ天を仰ぎて言い給う

イエスは祈る時に、「目を挙げ天を仰ぎて」といつて、目を開いて祈られることがあつた。時々そういうことが書いてある。

私も鹿沢の山の上で本当に目をあげて、天を見ひらいて、大声で叫んで祈った。時々、そういう経験をするといひ。もう遠慮も会釈もない。誰も聞いてやしない。聞くものは山の草木だけだ。

『父よ、時来れり、』

いよいよ時が来ましたと。この場合の「時」というのは「へ　ホーラ」という字が書いてありますが、この「とき」というのはむしろ「時機」の「機」の字だね。「戦わんかな時機^{とき}到る」なんていうときの「時機」だ。

「父よ」と。この祈りの中には「父よ」というのが七回位出てたかな。けれども、お祈りのときにあまり

「お父さん、お父さん」

と繰り返して言いなさんなよ。かえつて安っぽくなる。これはキリストはのつぴきならなくて、七回言つたんだから。なにか言葉の継ぎ目にちよつと言うような言い方をしないようにね。

子が汝の栄光を顕さんために、汝の子の栄光を顕したまえ。

この「栄光が顕れる」というのは、十字架を通つて彼が甦る。このことが「栄光の顕れ」なんです。

² 汝より賜わりし凡ての者に、永遠の生命を与えしめんとて、万民を治むる
権威を子に賜いたればなり。

永遠の生命を与える人が永遠の生命を持たないで、どうして与えることができるか。永遠の生命の現象は、霊生が――キリストが既にいただいているところの霊生が――十字架の贖罪の死を通つて必ず顕れざるを得ない。これほどはつきりしたことは他にないわけなんです。神の子が死につばなしなんて、そんな馬鹿げたことはおよそない。このコップの中に水があるということよりもつとはつきりしたことなんです。

「甦り」というと、なにか

「息を吹き返した」

なんて思っている。そんなのではないよ、甦りというのは。キリストは息を吹き返したのではない。キリストは、本来の生命がそこに顕れたというだけのはなし。

十字架はやむを得ずして、贖罪のために十字架にかかったんで、もういきなり天界へ行くこうと思つたら、ローマの軍隊なんか来たつて、そんなものは蹴散らして天界に行つてし



まうですよ、キリストは。それだけのもの凄い霊的な存在なんです。だから、キリストは十字架にかかることは、ちよつとこれは人間キリストとしては、

「困りますね、これは。この苦杯をどうか除けてください」

と、キリストは正直祈ったです。血の汗を流して祈ったという。

「もういきなり神さまのところへ行きたくしてしょうがないのに、なぜこの私があなたのところへ、いきなり行つてはわるいのですか」

「お前がもしいきなり来たらば、みんなの罪をどうするか。この罪をお前が全部背負ってもらう」

と。そのためには、これはイスラエルの宗教の脊椎骨であるところの、神の義が承知しない。罪に対する義が承知しない。その罪は審かれなければならない。滅ぼされなければならない。

「その審判、その滅びをお前が受けとれ」

というのが十字架ですから。

「極悪人となれ。お前は罪びとの首かしらとなれ」

ということだ。パウロは、

「われは罪びとの首かしらなり」

と言うけれども、キリストこそ「罪びとの首かしら」になった。彼ほど罪びとの首はない。どんな極悪人よりももうひとつ奥でもって、キリストは自分が極悪人そのものになって、全部その罪を背負ってしまった。

「お前たちは無罪放免だ」

と。このことを本当に受けとったら、もはや我々は全身が涙となるかなんかしらん。実存の真理というものは、客観的に認識するような真理ではないですから。だから、

「十字架は、客観的にものを認識しようとするギリシア人には、文化人には愚かにみえる。ただ徴ばかり求めているところのユダヤ人には躓きになる」

と言った。ユダヤ人は律法が自分で満たされると思っている。だから、十字架はユダヤ人には躓きです。

「そんな馬鹿なことがあるか」

と言う文化人には、これはバカに見える。けれども、

「我らこれを受けるものには神の力である」

とパウロが言った。そういう十字架です。

そして、そこを通ったから、キリストは霊生を躓さざるを得ないというのがキリストの復活です。それを受けとらないでいたんだ、弟子たちはみんな。キリストがちゃんとそのことを言っているのに。彼らの不信はまた何ということか。我々自身もその場にあつたら、同じく落第生である。この世でもって大いに何かすべてのことに及第したようなつもりでいても、どつこい天国では落第する人がある。この世では大いにいろんなことに失敗して



ダメなようだが、どっこい天国には及第する人がある。私は面白い天国篇を書こうと思っているんだけど。そういうわけですよ。

●イエス・キリストを知るにあり

その次の3節はヒルティの大好きな句です。

³ 永遠の生命は、唯一の真の神に在す汝と汝の遣し給いしイエス・キリスト
とを知るにあり。

「イエス・キリスト自身がこんな、なにかちよつとよそよそしいことを言うはずがない」

というわけで、普通の学者は、

「これはキリストの言葉ではない。あとから付け加えたんだ」

なんて言います。何かしらん。けれども、たとえ「付け加えた」と学者が言うとおりであろうがなかろうが、キリストがそのような自覚をはっきり持っていらつしやったことは確かである。

学者といえば、

「高等学校何年生以上でなければ、私の集会に来ることなかれ」

なんていう、そういう集会もあるそうだな。これは恐れ入ってしまったな。福音はそんなものじゃない。福音は万人に開示されている。どうも、無教会にはいろんなのがいるよ。無教会はインテリ宗教だ。わるくはないけれども、福音は無学の凡人にまず伝えられたものです。ペテロさんが実は大黒柱になった。

³ 永遠の生命は、唯一の真の神に在す汝と汝の遣し給いしイエス・キリスト
とを知るにあり。

「知るにあり」と。知ればいいんだと。知れば、それは真の生命。もうこの「知る」という字に躓いてしまうわけです、この「知る」という言葉に。同じ言葉を使っても、同じことを言いましても、全然内容がちがうということがあるのでね。それで、

「それは同じじゃないか」

というようなことをよく言うんだが、同じじゃないんだ。どうぞ皆さんは、

「言葉が同じでも、中味がちがうんだよ」

ということをはつきりしていただきたいわけです。

これも「ギノースコー」という、普通の「知る」という字がやはり使っている。ヘブライ語では「ヤーダツハ」という字です。これは全存在的に受けとることが「知る」なんです。全存在的に受けとることを「信ずる」とも言う。だから、その場合には、この「信」も「知」も同じこと。仏教の方の言葉に、「信知」というような言葉を使っている本があった。「信知する」と。それは本当の信知なんです。信ずることと知ることが一つ。



「まず本当に信じなければ知ることではないぞ。本当の知ることとは、信ずるということと一つなんだ」

と。どうも、近代人はすぐ頭だからね、すべてが。よほど警戒しないといかん。頭で分かっただけですか、それが。分かって、それでどうかなりましたか。頭の満足だけです。全存在の生命、力にはならない。

大体、その一番先の躰をきたしたのがソクラテスだよ。ソクラテスにおいては、知と行が、知行一致の世界、知行一如の世界にソクラテスはいたから、あれは素晴らしいけれども。ギリシア的な角度は知なんだ。

「本当に知れば、必ず徳は行われる」

と、そういうようにソクラテスはもう知行一如の角度でもって、そんな「知る」という言い方をしたからいいけれども。しかし、それが非常にまた危険であつたわけです。

でも、ヘブライ人の方は、ホゼヤ書に「知る」という言葉がたくさん出ている。このホゼヤ書の「知る」というのが、夫婦の関係は本当にお互いに知るといふ、その意味についての「知る」です。

「夫が妻を、妻は夫を知るがごとく、我れなんじ、わがイスラエルの民を知り、イスラエルの民はわれを知る」

という。そういう「知る」というのが、本当に信頼したところの、やはり信知なんだな。そういう「知る」です。こここの「知る」もそうなんです。

「神を本当に受けとり、自分（キリスト）を本当に受けとるということに永遠の生命はある」

と。そういう知り方、体得、体感、霊的人格的な交わりの世界に本当に現実に入ること、それが「知る」です。いいですね。それでなければ、永遠の生命というのはありつこない。

● 神の栄光の顕れ

4 我に成さしめんとて汝の賜いし業を成し遂げて、我は地上に汝の栄光をあ
らわせり。

もう既に自分が、キリストが召命を受けてから今日にいたるまで、福音書でここに書かれてあるとおり、神の栄光をどしどしキリストが顕しなされた。その言葉において、その行為において。キリストのしたこと、言ったことは全部神の栄光の顕れです。神の栄光の顕れであると同時に――神の栄光を顕すということは結局、証しているということです。身をもつて身証しているということ。身証することが同時に神の栄光が顕れているということ。あなた方もそうですよ。身をもつて福音を証していることが即ち、そこに神の栄光が顕れているので、御利益でも何でもありません。

普通の霊的な宗教もあります。新興宗教は、ある霊的なものを持っている。どこが違うか。



現象面では似たものがあっても、質がちがう。よつてきたるところがちがう。片一方は神の栄光の顕れである。他方は宗教的幸福主義である。そういう「オイデモニスムス」ではないというわけです。

⁵ 父よ、まだ世のあらぬ前に^{さき}汝と^{とも}偕にもちたりし栄光をもて、今御前にて我に栄光あらしめ給え。

これは第二番目の「父よ」だな。

「まだ世のあらぬ前に^{さき}あなたと一緒にいました」

と、キリストは言われた。もうはつきりしている。イエスの自覚というのはなんと素晴らしいか。

「この世の創造の以前から私はあなたと一緒にいた」

と。これが、霊界のキリストが地界のイエスとなったことのはつきりした言葉がそこに出ているわけです。

今御前にて我に栄光あらしめ給え。⁶ 世の中より^{うち}我に賜いし人々に我、^{みな}御名をあらわせり。

「あなたがどのような方であるかを事実をもつて顕した。他の神々とはちがう」と。

彼らは汝の有^{もの}なるを我に賜えり、^{しか}而して彼らは汝の言^{ことば}を守りたり。⁷ 今かれらは、凡て我に賜いしものの汝より出づるを知る。

「いかに地的なものと、地から発したものと、天から発したものはちがうかということ^{こと}をこの私を通して彼らはだんだん分かってきた」

ということですね。

⁸ 我は我に賜いし言を彼らに与え、彼らは之を受け、わが汝より出でたるを真に知り、なんじの我を遣し給いしことを信じたるなり。

この「信じたるなり」は「信じたればなり」ですね。そういうことで、本当に受けとつたから、みなあなたと私というものは、汝と我というものが、我を受けとつたから、だんだん彼らに分かってきた。「汝・我・彼ら」という言い方でたくさん言っておりますから。

●大祭司の執成し

⁹ 我かれらの為に願う、これは執成^{とりな}しです、即ち大祭司だから。

わが願うは世のためにあらず、汝の我に賜いたる者のためなり、即ち、救われた者たち、弟子たち。

彼らは即ち汝のものなり。

いつもキリストは一步そこに下がったような言い方をしている。「彼らは汝のものである」と。それからまたもうひとつ直接のものもありますけれども。



10 我がものは皆なんじの有^{もの}、なんじの有は我がものなり。

ほら、今度はそうなってしまう。彼らは汝のものだと。この

「汝のものは我がもの、我がものは汝のもの」

といって、汝と我とが一つですから。そうすると今度は、彼らともまた一つになってしまう。三つのものが一つになる。

我かれらより栄光を受けたり。11 今より我は世に居らず、彼らは世に居り、

我は汝にゆく。聖なる父よ、

「私は今度はあなたのところへ行つて、ここところがちよつと離れてしまう」と。

我に賜いたる汝の御名の中に彼らを守りたまえ。

「聖名において守ってください。私はあなたのところへ行つてしまつて直接ではないから、今度は御名だ」

と。聖き名です。汝の名はまた我が名ということになりますけれども。

これ我等のごとく、彼らの一つとならん為なり。

「あなたと私は一つです。彼らもまた私たちと一つになるためだ」

と。全くこの「一如」という言葉が非常に当たる。一如の関係になろうという。そのための執り成しです。

12 我かれらと偕におる間、われに賜いたる汝の御名の中に彼らを守り、かつ

保護したり。そのうち一人だに亡びず、ただ亡びの子のみ亡びたり、

「亡びの子」というのは聖霊に逆らっている者のことです。

聖書の成就せん為なり。

詩篇41篇にそういうことが書いてある。

13 今我なんじに往く、而して此等のことを世に在りて語るは、我が喜^{よろこび}悦を彼らに全からしめん為なり。

「行くのはちよつと始めは悲しいかもしれないけれども」

と、前の方に書いてありましたね。ちよつとしばらくは悲しいが、そのうちに喜びがやってくる。16章に書いてある。そして、

「その喜^{よろこび}悦は何者も奪うことができない」

と書いてある。この喜びが彼らに全からしめんためにと。

14 我は御言^{みことば}を彼らに与えたり、而して世は彼らを憎めり、

これも16章にあつたね。

我の世のものならぬごとく、彼らも世のものならぬに困りてなり。

世と別れていると。

15 わが願うは、彼らを世より取り給わんことならず、惡より免^{まぬが}らせ給わんことなり。



「悪」より、即ち悪しきものから、悪魔からまぬがらせ給わんことなりと。即ち、世の中にあっていいんだけど、世からただ隠遁させるのではなくて――彼らは世の中にある。世の中にありながら――彼らから別ってもらいたいためである。

●遣わされた者

¹⁶ 我の世のものならぬ如く、彼らも世のものならず。¹⁷ 真理にて彼らを潔め別ち給え、

聖別し給えと、

汝の御言は真理なり。¹⁸ 汝われを世に遣し給いし如く、我も彼らも世に遣せり

聖別したから、これは聖徒です。彼らを聖徒にする。我々を聖徒にする。そして、それは遣わしたから使徒である。あなたが私を遣わしなされたごとく、私も彼らを遣わすと。即ち、キリストのものはみな使徒であり、聖徒である。我々は罪びとであるけれども、別たれたる者、恵みによって別たれたる者だから、あなた方はみんな聖徒ですよ。聖徒であると同時に使徒である。

¹⁹ また彼等のために我は己を潔めわかつ、これ真理にて彼らも潔め別たれん為なり。²⁰ 我かれらの為のみならず、その言によりて我を信する者のためにも願う。

決してキリストはその自分に遣わされた者ばかりではなくて、

「彼らを受けて私を信する者のためにも願う」

というので、今度は他のすべての人に向かつての執り成しの祈りになってきているわけです。

「遣わされた者」というのは何のことかというと、他の人たちを救わんとして遣わされた者だからね、使徒というのは。我々は「遣わされた者」ということは、使徒であるということは、即ち、他の人たちを救うところの責任を担っているんだからね、我々は。他の人たちを救いの世界に入れる責任を担っている。その責任を持たないで、ただ

「救われた、よしよし」

なんて言っているのは本当の使徒ではないですよ。私たちは常に世に向かつて働きかけ、そして、世を神の国に化していく、世の中に神の国を展開していく使命をおびている。それが使徒。キリスト者とはそのような者である。

「別たれた」からといって、

「あいつらと俺たちとはちがうんだ」

と言ってお高くとまっていたら、これはパリサイ人^{びと}です、そんなのは。私たちは別たれたからいいよ、また世そのものから、サタンから他の人たちを救い別つための、そういつ



た使命を持ったところの使徒であるわけです。遣わされたる者と。だから、使徒たちは、この信仰の中に入って、彼らはもの凄く、殉教の死を遂げるまでも伝道して行つたでしょ。

「使徒的信仰」というのは、そのような働きかけ、力強い動的な動き方をしなくては。ただ日曜に来て集会してお終いではない。我々は、六日間のうちに誰にでつくわそうとも――なにも無理やりに妙な新興宗教とはちがうけれども――とにかく、困っている人や行き詰まっている人や求める人に、

「こういうことですよ」

と言って、恐れなくこの福音を伝えていなくては。本当に知らないでいて、そういうものにぶつかつたら本当に救われる喜ぶ人がいるんですよ、そこそこに。それが、ぶつかるものにぶつかっていないんだから。我々はそのぶつかるものにならなくてはいいかん。そういうわけです。

お医者さんやなんかも、たくさん患者を取り扱っているから、どしどしやってください。私なんかも学校で学生にそれをやっている。けれども、なかなか飛び込んでこない。

¹⁹ また彼等のために我は己を潔めわかつ、これ真理にて彼らも潔め別たれん
為なり。

「真理にて」というのは、「真理の中で」という、「エン・アレテイア」という言い方をしています。「何々をもつて」という言い方のときによくこの「エン」「イン」という字が書いてある。訳は「もつて」だけれども、本当は

「その中であつて」

という気持の場合がむしろ根底なんです。

●一つとならんため

²⁰ 我かれらの為のみならず、その言によりて我を信ずる者のためにも願う。

²¹ これ皆一つとならん為なり。

今度は、「一つ、一つ」とたくさん書いてある。

²¹ これ皆一つとならん為なり。父よ、なんじ我に在^{いま}し、我なんじに居ることく、
彼らも我らに居らん為なり、

これも、「の中に宿る」という「居る」という字です。だから、これが全く一如一体の世界になろうと。「信ずる」とはなんと内在的なことかということがはつきりわかるわけです。「信ずる」とか「知る」とかいうことが。もうそこは概念をぶち破らなければ、既成概念をぶち破らなかつたらダメです。

どこへ行きましても、欠けたるは補い、間違えは認識でき――なにも人を審く意味ではないです。審いたら自分がパリサイになりますから――とにかく、自由自在な、一切を包摂し、間違つたものは「否^{いな}」と言うことができるようになっていくわけです。問題は、



相対的に善いとか悪いとかいうことでなくて、絶対的な善さという世界、絶対的な真理の世界、それだけをいつも問題にしている。

シュバイツァーが「絶対的倫理」(アブソルute・エーテッヒ)という言葉を使っていたけれども。絶対的倫理というものは、

「キリストの求めているもの、福音書の言葉は、アブソルute・エーテイク(絶対的倫理)の世界で、いわゆる相対的な人間の倫理とはちがう。相対的倫理でもってだんだん善くなっていこうなんていうのは神の国ではない」

と、シュバイツァーさんが言っているとおりで。

是我們らの一つなる如く、彼らも一つとならん為なり。²³ 即ち我かれらに居り、汝われに在し、彼ら一つとなりて全くせられん為なり、是なんじの我を遣し給いしことと、我を愛し給うごとく彼等をも愛し給うことを、世の知らん為なり。

この23節は素晴らしい言葉です。

「即ち我かれらに居り、汝われに在し、彼ら一つとなりて全くせられん為なり」

と。汝と我と彼らとが全くこれで一つでしようがと。エペソ書の中に「一つ、一つ」という言葉があるね。あれとあい通ずるようなところだ。そして、コリント前書の10章16節に、

「¹⁶我らが祝うところの祝の酒杯は、これキリストの血に与るにあらずや。我らが擘く所のパンは、これキリストの体に与るにあらずや。¹⁷パンは一つなれば、多くの我らも一体なり、皆ともに一つのパンに与るに因る。」(コリント

前10・16・17)

ここに「一体」という言葉と「与る」という言葉があるでしょ。この「与る」という字が「コイノニア」という字で、「コンユニオン」、一つになしてしまう。我々の間は本当に御霊にあるときには、みなが一つの体となつて、「コイノニア」、本当に兄弟姉妹です。結婚しようがしまいが、そんなことはどうでもいい。そういったこの世の秩序をもうひとつ乗り越えたところの天的な秩序は、我々が兄弟姉妹であるということです。そういった兄弟姉妹ということが本当に言えるためには、聖霊が来ていなければ言えない。それでなかったら、「兄弟姉妹」なんて言つたつて、それは偽りですよ。聖霊が、一つにするんだから、御霊だけが、御霊が来てなくて、

「私の信仰はこうです。あなたの信仰はこうです」

なんて、信仰のなにか条件みたいなものを合わせて一つにしようとしたつて、それはダメだよ。そういうキリストの生命が本当に来てます。そうしたら、あなたの生命と一つです。

さつき、親子のいろいろな関係のことも言われたけれども、それは人間の血を分かっているということは争えないひとつの非常に深い関係です。しかし、キリストの霊の血を分かっていたら、これはもう他の関係以上の凄い関係です。天地を貫いている関係です。地



上において既に天的現実がそこに現象している。天的現実がこの相対的現実の中に入っているんですよ。向こう側に行ってからやつと天的現実ではない。地上において既にその天的現実がある。

「天国は既に汝らのうちにあり」

というのがそのことなんです。神の霊の支配するところが即ち天国ですから、汝らのうちにありと。

それが「一つとならんためなり」です。キリストのこの執り成しの祈りはみんな中心はこの聖霊にかかっている。どうしてそれが一つになるか。それは、

「助け主がきて、慰め主がきて、御霊がきて、真理の霊がきて、お前たちを本当に一つする」

と。もうそのことは前から語られているわけですからね。

●キリストの本願

是なんじの我を遣し給いしことと、我を愛し給うごとく彼等をも愛し給うこ

とを、世の知らん為なり。

いかに我々が、神のあなたの愛でもって貫かれて、そしてそこが一体となっているか。それを世が知らんがためである。そうすると、

「私たちもああいう祝福された中へ仲間入りしましょう」

というようなわけですな。

²⁴父よ、望むらくは、我に賜いたる人々の我が居るところに我と偕におり、

世の創の前より我を愛し給いしによりて、汝の我に賜いたる我が栄光を見ん

ことを。

いよいよ永遠の生命の栄光がそこに見えるように。その内実は愛である。愛の生命。力があるんですよ、この愛は。いいですか。いい加減な愛ではないですよ、これは。愛は最強の力を持っているんですから。この神の愛は一切のものを変質変貌するところの力を持っている。

²⁵正しき父よ、げに世は汝を知らず、然れど我は汝を知り、この者どもも汝の我を遣し給いしことを知れり。

この最後の26節がまた大事です。

²⁶われ御名を彼らに知らしめたり、復これを知らしめん。これ我を愛し給いたる愛の、彼らに在りて、我も彼らに居らん為なり』

この「彼ら」というのが全部、この世から選ばれる人たちで、もうずっと浸透しているような拡大されたような「彼ら」とみて差し支えないと思いますが。そういうように結局、一つにするものは愛であった。その愛は即ち、御霊における愛である。それに帰着するわ



けです。聖霊だけが、聖霊は愛の霊であるから、これだけが一切を一つにする。「父・我（キリスト）・我々」、その執り成しの祈りがキリストの、この大祭司キリストの17章の祈りです。どこまでもキリストは我々の中にくだってきて、そしてこれを一体化せんとする、ただその一つのことだけを祈っている。ただ一つ、その一つのことだけを。その他何も祈ってない。「そこにあなたの栄光が顕れる。それが天国である」と。この聖霊に深く満たされていなければ、この17章は読んでも通じません。聖霊に本当に満たされながら、祈りをもつて読むときに、これがどんなにキリストの熱い祈りであるか。もうキリストと離れようとしたって、これは離れるわけにはいかんという。

「もし私がこのキリストを持つならば、一切はいらん」

と、ノバールリスの讃美歌の中にありますけれども。ということは、

「もう一切を実は包摂してしまう」

という世界です。

「彼を持つているところが即ち天国、祖国である」

と。そして、キリストの愛を讃えて、ノバールリスが、

「あなたは信実なる愛に満ち満ちておられる。あいかわらず今でも誰のもとにもおられる。誰でもがあなたのところに留まらないことがあろうとも、あなたは決してその信実を裏切らない。こつちが裏切つても、あなたは裏切らない。この最も信実なる愛は勝ち誇る。遂には人もそのことに感ずるだろう。悪かったと言って泣いて、あなたの膝もとにすがりつくであろう。」

というような歌もありますけれども。

キリストの愛が一切を救い上げてやまない。これが一如とせんとするところのキリストの本願である。だから、執り成しの中に実はそういった本願が含まれているところの執り成しであって、我々人間の単なる執り成しの祈りよりもっと力強い。彼自身が即ち神の子ですから。

キリストがかくも私たちを、

「もう大丈夫だ。お前たちとは一つなんだ。どうか、みんながそういったコイノニ

アの中へ入って行けよ」

と言って、このヨハネ伝17章の祈りが、もの凄いい、私たちを包摂するところの、救い上げるところの、一体化するところの、内住せしめるところの、そういう力強い祈りであることを受けとる。おしまい。

